

1 策定の背景

- マザーレイク21計画(第2期)では、「つながり」をキーワードに、行政施策の推進と合わせて、多様な主体の取組を後押ししてきた。
- 併せて、多様な主体の参画の場として「マザーレイクフォーラム」を県が中心となって設置し、計画の進行管理を担ってきた。
- 毎年開催のマザーレイクフォーラム「びわコミ会議」では、200名程度の参加者が琵琶湖との関わりを約束する「コミットメント」を宣言するなど、一定の成果をあげてきた一方、個人の参加者が限定的であることや、企業からの参加が少ないといった課題もあった。
- 複雑化・多様化する琵琶湖の課題解決に向けては、琵琶湖保全再生計画に基づく行政施策を進めると同時に、終了するマザーレイク21計画の成果を引き継ぎ、より多くの主体が、自主的・積極的に琵琶湖の課題解決に関わることできる新たな「仕組み」を構築していくことが必要となってきた。



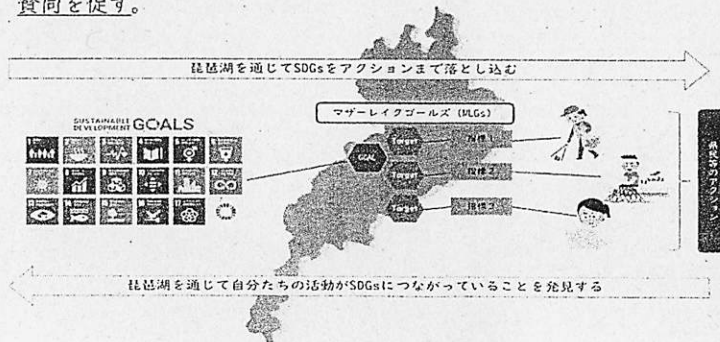
「びわコミ会議」の様子

2 新たな「仕組み」の考え方

多様な主体による協働の取組を進めてきたマザーレイク21計画の「強み」を生かしながら、SDGsやパリ協定など新たな考え方を取り入れ、取組を全県的なムーブメントとして拡大し、下流域も含め、より多くの多様な方々に参画していただける仕組み=マザーレイクゴールズを構築する。

3 マザーレイクゴールズ (MLGs) とは

- MLGsは琵琶湖版のSDGsであり、琵琶湖を通じてSDGsを県民のアクションまで落とし込むもの。
- より多くの多様な主体がSDGsをより自分ごととして捉えられるよう、滋賀県民の暮らしを映す鏡である琵琶湖を象徴として、2030年に向けて、独自のゴールを設定するもの。
- 琵琶湖は国民的資産であり、県民だけでなく下流域や県外の方々の賛同を促す。



4 MLGsアジェンダとは

SDGsを参考に、取組の目標(マザーレイクゴールズ)やターゲット、アクション、指標のほか、基本理念や推進体制等を記載した「提案文書」が「MLGsアジェンダ」である。

5 検討の経緯

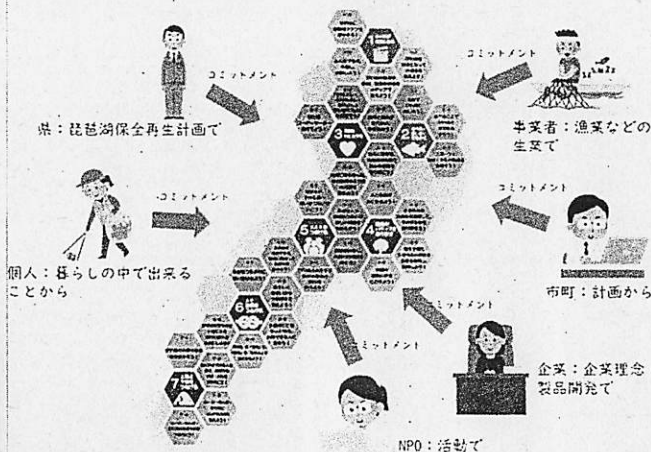
県が中心となって作成した「たたき台」をベースに、マザーレイクフォーラム運営委員等と協議を重ね、県民・企業・下流域県民・学生など多様な主体が参加したワークショップにおける議論を経て、MLGsアジェンダ(素案)を検討してきた。

6 策定主体と時期

- MLGsアジェンダは、これまでの活動の集大成として、県が中心的となって運営してきた「マザーレイクフォーラム運営委員会」が起草し、次世代へ引き継ぐ。
- MLGsは、令和3年7月1日(びわ湖の日40周年)を機に、多様な方々の賛同を得て策定する。

7 MLGsへの参画イメージ

各主体は各々が関わるゴールに対してコミットメント(約束)し、琵琶湖への関わりを見える化する。

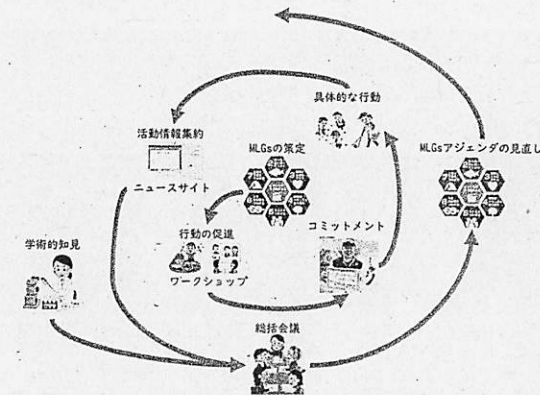


8 推進体制

- 意思決定機関として、「マザーレイクゴールズ推進委員会」を設置し、当面の間、県が事務局を担う。
- 地域での活動促進や団体間をつなぐ役割を担う「MLGs案内人」や、学術的知見に基づき琵琶湖や指標の状態をチェックする「学術委員」を設置する。

9 進行管理

- 1年に1回「総括会議」を開催し、多様な主体の活動の経験と最新の学術的知見を持ち寄り、MLGs達成の進捗状況を議論する。
- 総括会議の議論の結果に基づきMLGsアジェンダ(ゴールズを含む)を見直し、新たな活動につなげていく。



10 県の役割

県は、推進体制の運営や、指標の取りまとめなど進行管理を責任を持って行うとともに、MLGs達成に向けた取組の一参加者となる。



Mother Lake Goals

変えよう、あなたと私から

マザーレイクゴールズ (MLGs) で設定する13のゴール (素案)

1
清らかさを
感じる水に

川や湖の水質がよく、アオコや赤潮などのプランクトンの異常発生も抑制され、飲料水としても問題のない清らかな水を維持していく

2
豊かな魚介類を
取り戻そう

在来魚介類の資源量を増やし、漁獲量を持続可能な形で増加させる

3
多様な生き物を
守ろう

生物多様性の危機に対する取組が拡大し、野生生物の個体数の増えすぎ・減りすぎといったバランスの崩れが解消される

4
水辺も湖底も
美しく

川や湖にごみがなく、砂浜や水生植物などが適切に維持・管理され、誰もが美しいと感じられる水辺景観を守る

5
恵み豊かな
水源の森を
守ろう

水源涵養や生態系保全、木材生産などの多面的機能を持続的に発揮する森林づくりを進める

6
森から湖海の
つながりを
健全に

森から湖、また海に至る水や物質のつながりが健全に保たれ、また湖と川、内湖、田んぼなどを行き来する生きものを増加させる

7
びわ湖のためにも
温室効果ガスの
排出を減らそう

日常生活や事業活動から排出される温室効果ガスを減らす取組を広げ、琵琶湖の全層循環未完了などの異変の進行を食い止める

8
気候変動や
自然災害に
強い暮らしに

豪雨や渇水、温暖化などの影響を把握・予測し、そうした事態が起きても大きな被害を受けない暮らしに転換していく

9
生業・産業に
地域の資源を
活かそう

地域の自然の恵みを活かした商品や製品、サービスが積極的に選ばれ、地域内における経済循環が活性化し、ひいては環境が持続的に守られる

10
地元も流域も
学びの場に

琵琶湖や流域、自分が生活する地域を環境学習のフィールドとして体験・実践する機会を提供し、関心から行動に結びつける人を増加させる

11
びわ湖を楽しみ
愛する人を
増やそう

レジャーやエコツーリズムなどを通じて自然を楽しむ様々な機会への参加を増やし、琵琶湖への愛着を育む

12
水とつながる
祈りと暮らしを
次世代に

水を敬い、水を巧みに生活の中に取り込む文化や、水が育む生業や食文化を、将来世代にわたり継承する



13
つながりあって
目標を達成しよう

年代や性別、所属、経験、価値観などが異なる人同士、また異なる地域に住まう人同士が、琵琶湖の現状やこれからについて対話を積み重ねる、またそのような場づくりを進める